意見の分かれるところですが、ちなみにある調査機関の資料によると、今年の東大理科Ⅱ類のセンター試験の合否ボーダーラインが百点満点で八六・三点、合格者の二次試験の平均偏差値が六五・〇であったとだけ述べておきます。

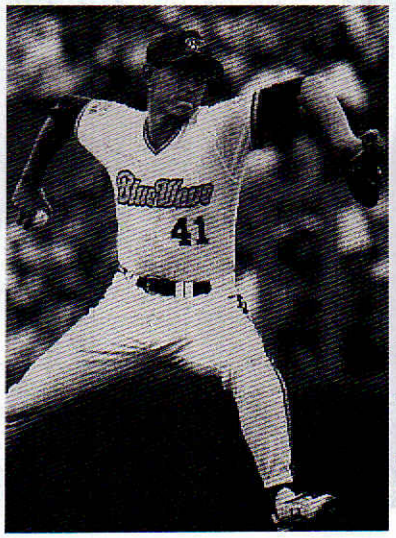
予報確率の一番いいのが、冬型の気圧配置の時、毎日太平洋側を晴れ、日本海側を雪としておけば大体あたります。もちろん、私たちは占いをやっているのではありませんので、このような予報はいたしません。逆に、はずれるケースが多いのが季節の変わり目です。梅雨明け間近と予報したのに、前線がなかなか北上してくれないなどのケースが起こりがちです。

天気予報には、統計も重要なウェイトを占めています。昭和三九年、東京オリンピックの開催日時の決定に、この統計資料が一役かったのです。まず、北欧諸国からの要望で、開催は十月頃と決まったようです。十月初旬まで続く秋雨の時期、これの終わりはいつかと判断するのが、気象庁の腕の見せどころでした。十月後半にもってくれば、雨の心配はほぼ解消するのですが、日本の秋から冬への移行は意外に早い。後半の競技に寒さの影響があってはならないだろうという意向のもと、統計資料を駆使して、ぎりぎり早めて開催日を十月十日としたわけです。九日までの雨が十日にはあがり、晴天下で挙行された開会式を見て、気象庁一同鼻高々であったといわれております。

私は今、朝三時半に起床しまして、一度気象庁に寄り、五時半にNHKに入ります。いってみれば、早起きが私の仕事の半分ぐらいなもので、NHKに到着すれば、仕事の大半は終わったようなもの。後はほんの短い生放送で、黒田キャスターらの突っ込みに、しどろもどろに受け答え、ポロリと能代弁を出しながら、あわただしく画面から消えるのが、私の週末です。

耳まで上気、故郷に晴れ姿

オリックス・ブルーウェーブス　高橋功一



秋田市営八橋球場。能代高校時代はあこがれの場所だった。3年生の夏は県予選の3回戦で敗れ、この球場のマウンドには立つことさえできなかった。あれから6年が過ぎた。

平成七年六月四日、故郷に晴れ姿を披露する場は、つい先頃の汚名をなにがなんでも返上する場でもあった。前回、五月二十八日の西武戦での登板では、わずか四回で5失点。仰木監督に「逃げて四球を出すな。どうせ負けるなら正々堂々正面からぶつかってこい」と、きつく叱られた。

イチローを始めとする打撃陣がいくら好調でも、それだけでは優勝は望めない。野田、長谷川、星野の三本柱に続く四番手投手としての成長を期待する監督の愛の鞭なのだ。

監督以上の期待に胸を踊らせているのが、スタンドを埋めつくし、「高橋！」を連呼する郷土のファンだった。平静を装いマウンドに向かう足が震えた。鼓動が大きく耳を打った。ふだんは色白のはずの顔が、耳まで赤くなるほど上気していることに気づいた。

相手はバレンタイン監督を迎え、昨年に比べると、一枚も二枚もねばり強さを加えたロッテ球団だ。打率でイチローにぴたりとつける元大リーガー・フランコが四番にすわる。「調子はいい」と自分に言い聞かせ、第一球を投げた。「逃げないぞ」と、この日は最初から積極的にストライクを取りにいった。

広島では近藤さん（能代商高出身）も主戦の一人として頑張っている。一回裏、早くも3点をプレゼントしてくれた味方打線の援護もあった。負けられない、という気負いもいつしか消えていた。

七回ワンアウト後、フランコにこの日初めてのヒットをセンター前にもっていかれた。続く初芝にもヒットされた。しかし、なんとか後続を抑えた。八回から清原、鈴木のリリーフ陣にマウンドは譲ったものの、3安打、7三振、2四球の好投だった。完投はできなかったが、このマウンドで白星をあげた。

試合後、母校の大先輩でもある山田ピッチング・コーチは報道陣にこう語った。

「ピッチャーに限らず、だれでも、故郷のグラウンドでは、意外にいい仕事ができないものです。私にしろ、落合にしろ、このグラウンドには、何度か『ゴメンナサイ』と謝っています。まして、高橋クラスのピッチャーには大変なプレッシャーがあると思いますよ。でも、これだけ投げたのですから、もう安心とはいえないまでも、これで一皮むけると思いますよ」

第三部　懇親会

●開会の挨拶●

秋田県立能代高校東京同窓会副会長
近藤　誠氏　旧制十六期

みなさん今晩は。旧制十六期の近藤でございます。お酒を前にして気もそぞろという方もおられると思いますが、役目上ご挨拶申し上げます。

今年もこのようにみなさんの元気な顔を見せて頂きまして、本当にありがとうございます。先ほど会長の話にもあったように、同窓会に意義をもたせるのは非常に難しい。しかし、とにかくこうして集まることに意義を見いだす、これも一つの方法だろうと思います。

われわれは同じ学窓を巣立って、いろいろな思い出を共有するわけです。先ほどの関根さんのお話で、ちょっと思いついたのは、過去は過去としてわれわれの未来を思う時、今日このひと時が、われわれのこれからの人生で一番若い時になるわけです。若い人の中には、「年取っているからそう考えるのだろう」と思う方もいらっしゃるかも知れませんが、とにかく、今日この若さで、大いに張り切って第三部を盛り上げて頂きたいと思います。

ありがとうございました。続きまして、第二二代能代高校校長の草彌辛太郎先生と第二六代校長加賀正隆先生にお言葉を頂きたいと思います。

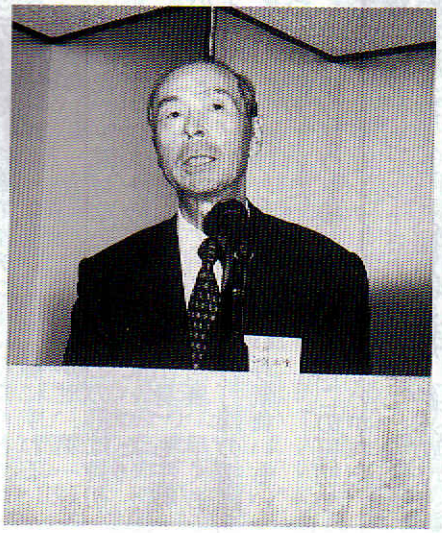
第二二代能代高校校長
草彌辛太郎先生

私は、能代高校では五三年から五六年にかけて、二年と十カ月の間、校長としてお世話になりました。硬式野球部の二年連続甲子園出場、軟式野球部の全国大会準優勝、国体での優勝など数々の思い出がありますが、それらに関しましては、みな様のお手元のパンフに私の紹介欄がありますので、それを私の挨拶の一部とさせてください。

私は大曲の在の出身でありまして、県北の地は能代がはじめてでございました。能代は市民性も大変よくて、しかも友情あふれる先生方に囲まれ、向学の志に燃える生徒に会うことができて、大変心強く、教師としての冥利を満喫したことを覚えております。

能代高校の前身、能代中学の初代校長を務められた武藤健三郎先生の「至誠力行」を教育指針とし、教師の研究姿勢こそ生徒の学習意欲をかき立てるものであるという見地から、研究紀要を発刊したことも、非常に懐かしい思い出の一つです。

語れば尽きぬものがありますが、これをもって、私のご挨拶とさせて頂きます。



第二六代能代高校校長
加賀正隆先生

しばらくでございます。私は、昭和六三年四月から平成二年三月まで校長を務めさせて頂きましたが、神馬会長ともども、ふだんのご協力に対するお礼かたがた、学校および同窓会本部